

始

まりは、いつも上町台地。

上町台地
UEMACHI 名大物阪 DAICHI
台地

記録集 Vol.1【歴史編】





▲シンポジウム会場になった玉造稻荷神社

『大阪名物「上町台地」－始まりは上町台地』歴史編 「大阪の観光文化の今・昔」シンポジウム

2010年3月13日

大阪の「背骨」と言われる「上町台地」。古くから歴史を刻み、人と物の交差点でもあった上町台地は、江戸時代に大流行した「お伊勢参り」の出発点でもありました。このシンポジウムは、上町台地を大阪市内外の人に知ってもらう企画として開催。「お伊勢参り」の歴史も振り返りながら、江戸期から現在にいたる上町台地を中心にした大阪の観光文化をさまざまな視点から見つめ、共に考えてみました。

落語や「道中日記」に残る 「お伊勢参り」観光

第一部では、落語家の笑福亭仁智氏が、東西の気質の違いを語って笑わせながら、そうした「違う文化」にふれることが旅の楽しみでもあると語り、「お伊勢参り」を題材にした上方の古典落語「三人旅」を口演しました。これは「東の旅」と呼ばれるオムニバス大河落語の一つでもあり、江戸時代の大坂～伊勢参宮の旅の点景を生き生きと描いた噺。庶民は、長い道中で歩

き疲れると馬も利用して旅を続けたのでしよう。そんな様子を伺い知ることができました。

第二部では、大阪城天守閣・研究副主幹の北川央氏が、江戸時代の人々はどんな観光をしたのか、について講演。大坂発祥の「浪花講」という画期的な旅のシステムが定着し、全国に安全で便利な旅のネットワークが確立された江戸時代。一生に一度と言われた旅の大半は「お伊勢参り」で、そうした旅のシステムが最大限に活かされました。北川氏は、「東からの旅」として、東日本からのお伊勢参りの旅を「道中日記」で振り返りながら、当時の大坂が日本一の観光都市であったことも詳しく紹介。会場の参加者は、お伊勢参りや巡礼の途中で旅人が必ず立ち寄ったという大坂のにぎわいと、昔の観光文化に想いをはせました。



▲北川央氏



▲笑福亭仁智氏



当日のプログラム

会場にはさまざまな展示も▶

- 第一部 落語「東の旅」笑福亭仁智氏
- 第二部 講演「東からの旅～お伊勢参りと大坂観光」北川央氏
- 第三部 パネルトーク「大阪の観光文化の今・昔」
笑福亭仁智氏、北川央氏、オダギリサトシ氏、
コーディネーター・栗本智代氏

歴史や人とふれあう ～現代の大阪観光の可能性

パネルトークでは、昔と今の上町台地の観光について思い思いの意見が語られ、現在、「大阪旅めがね」というまち歩きの観光プログラムを実施しているオダギリサトシ氏が、地元の人と話し、そこの生活文化にふれる、という一歩踏み込んだ観光の可能性を提言。笑福亭仁智氏は、昔のように実際に街道を踏破した「伊勢参り落語会」の体験を話し、忘れていた人との

ふれあいを再発見したことを語り、また、上町台地を舞台にした上方落語もいくつか紹介しました。北川央氏は、大阪および上町台地をアピールするイベントを数多く企画して来た中で、やはり大阪城と大坂の陣関係の史跡に対する関心は高く、そこに付随する歴史の物語を語る新しい観光のスタイルを提唱しました。

上町台地から考える今の大阪観光は、意見も尽きない話題でしたが、大阪の歴史の宝庫である上町台地を知ってもらう良い機会になったのではないのでしょうか。

シンポジウム「大阪名物「上町台地」～大阪の観光文化の今・昔～」



東からの旅

お伊勢参りと大坂観光



北川央氏
(大阪城天守閣 研究副主幹)

昔、日本一の観光都市だった
大坂のにぎわい



浪花講の木製看板▶
(玉造稻荷神社所蔵)

「安心」を約束した 画期的な旅のシステム「浪花講」

江戸時代の「お伊勢参り」と大坂の観光についてお話ししたいと思います。江戸時代には、たぶん我々が予想するよりもはるかに高度な旅行のシステムが出来上がっていました。そうした江戸時代の旅の背景をひもときながら、実際に東日本の人がお伊勢参りをした「東からの旅」はどのようなものだったのか、旅人が残した日記をもとに、彼らの大坂観光の様子を追体験してみたいと思います。

まず、江戸時代の旅について語るとき、忘れてはならないことがあります。文化元年(1804)に、大坂の玉造清水町の松屋甚四郎という唐弓の弦師(とうゆみのつるし。木綿を打って柔らかくす

る道具の製作・販売)の手代・源助という人が、主人と相談をして「浪花講」というものを結成しました。これが江戸時代の旅のシステムを考える上で、画期的な出来事となったのです。

源助は、唐弓弦を販売するために各地を旅行していたわけですが、その際に非常に悩まされた苦い経験があります。全く見ず知らずの土地で、どの宿へ泊まったらいいのかわからない。泊まってみると、ぼったくられて大変な目に遭うこともしばしばありました。そんな体験をもとに思いついた新しいビジネスが「浪花講」でした。いわば、我が国初の協定旅館組合です。源助は、各宿場町で安心して泊まれる、サービスの良い、しかも安い旅館を選んでネットワーク化しました。それが浪花講というシステム。選んだ旅館には木製の看板が配

旅籠「ひやうたん河内屋庄右衛門」の引札▶
(大阪引札研究会編「江戸・明治のチラシ広告
大阪の引札・絵びらく南木コレクション」)

られて、店先に吊るされましたので、誰が見てもそこが浪花講加盟旅館だとわかります。さらに、ガイドブック・ガイドマップも作り、それぞれの宿場町でどこが浪花講の協定旅館か一目で分かるようにして、無料で旅人に配布しました。当然、旅人には重宝がられ、旅館の方からも宿泊客が増えたので大変喜ばれ、浪花講は大ヒットするわけです。やがて、浪花講を真似たものもいっぱい作られ、幕末までに三十余りの同じような「なんとか講」というネットワークが誕生しました。

ガイドや土産物、宅配便など 観光のすべてを担った宿

江戸時代の旅人は、こういう安心できる旅のシステムに乗かって旅行を続けました。多くの旅人が訪れる江戸、京都、大坂、奈良、堺などには有料ガイドもありました。旅人は泊まった宿屋でガイドを斡旋してもらい、彼らの案内で市中を見物する、というシステムが江戸時代にすでにあったわけです。この有料ガイドのことに限らず、江戸時代の旅の中で一番キーになるのは旅館という存在でしょう。

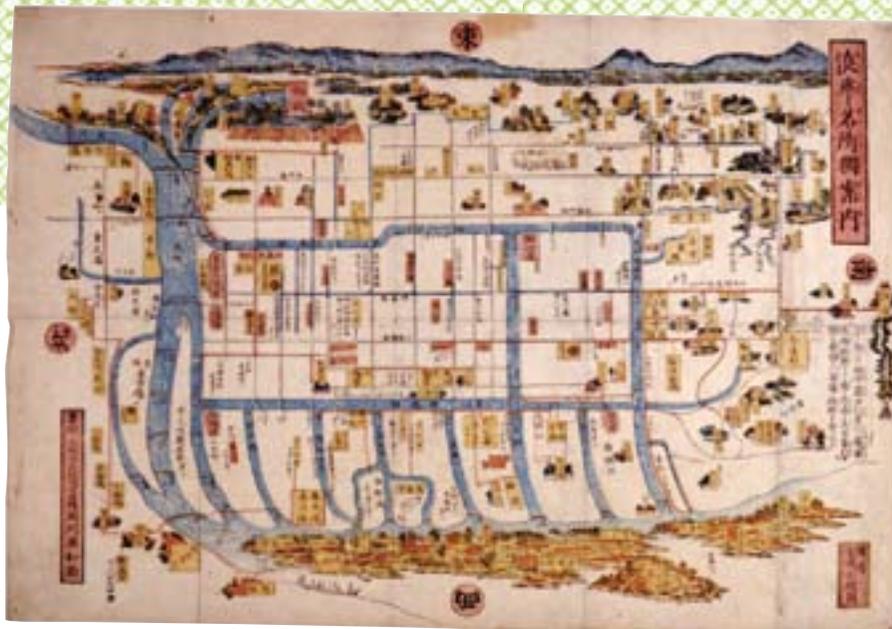
大坂で言いますと、今は電気屋街として有名な日本橋の商店街のところを「長町」と呼び、あの界隈に旅館がたくさん集まっていました。江戸時代、「大坂三郷」と称された大坂の町は、道頓堀と大川に挟まれた地域、大川の向こうの天満、そして大坂城周辺の上町、おおよそこうした範囲が江戸時代の大坂だったわけで、それより北の梅田や南の難波などは町ではなく村場でした。ところが、この長町だけは紀州街道に沿って長く突き出た「町」だったので、「長町」と呼ばれました。こ



こにたくさんの旅館が軒を連ねていました。中でも大坂で1、2位を争った代表的な旅館が「ひやうたん河内屋」と「分銅河内屋」で、どちらも客室数は百前後もある大旅館でした。「御定宿（おんじょうやど）、ひやうたん河内屋庄右衛門」と書かれた「ひやうたん河内屋」の引札が残っています。引札というのは、今の言葉で言うチラシで、お客様を引っ張ってくる札、つまり印刷物のこと。これを見ますと、「御定宿・・・」と書かれた上に、ひょうたんマークが描かれ、その両側に、「屋根にこの印」と書かれています。うちの旅館の屋根にはひょうたん印が上がっていますので、それが目印ですよ、ということですね。その隣には「ひやうたん河内屋」の店先や大坂名所を描いた絵があり、「ひやうたん河内屋」の二階の欄干の所から棒が突き出ている、その先にひょうたんの印がついています。

その右には、別の目印も見えます。これは隣の「分銅河内屋」のもので、左右にふくれあがって真ん中が凹んでいる分銅のマークが描かれています。「ひやうたん河内屋」とは姉妹店で、本家と分家にあたります。有名な『東海道中膝栗毛』の弥次さん喜多さんの二人は、「分銅河内屋」の方に泊まる設定になっています。さらに、この引札の「御定宿 ひやうたん河内屋庄右衛門」と書かれた部分の左側を読みますと「京都のぼり船、讃州金毘羅船、毎日出し申し候・・・」とあります。一般に京都への上り船、すなわち京と大坂をつなぎ淀川を往来した三十石船は、八軒家からだけ出ていたと

東からの旅 お伊勢参りと大坂観光



▲友鳴松旭図「浪華名所独案内」
(大阪引札研究会編『江戸・明治のチラシ広告 大阪の引札・絵びら<南木コレクション>』)

思われがちですが、実は、この「ひやうたん河内屋」に近い日本橋辺りも含めて、大坂のいろんな所から、京都上り船は出ていました。もちろん京都から下る船も、いろんな所に着きます。そして、讃岐の金毘羅さんへ向かう船も、「ひやうたん河内屋」では毎日出していました。

引札の文章を続いて読んでみますと、「並びに、諸国書状荷物取次ぎつかまつり候」。江戸時代には、もう郵便や宅配便みたいなシステムがありました。全国どこへでも手紙や荷物を届けますよ、ということです。江戸時代の旅人は、このシステムを利用して、故郷に土産物を送りました。また、今とは違い電車やバス、飛行機もありませんでしたから、長期旅行の荷物をたくさん持って歩くのはたいへんだっただろうなと思われるかもしれませんが、その場合もやはりこのシステムを使って、旅人は次に泊まる旅館へ先に荷物を送っておいて、本人らは身軽な旅を続けたのです。そんな便利なシステムが江戸時代にすでにあったわけです。さらに、その左側には「芝居ご見物の節は、私方、直々取っつかまつり候あいだ、外かたよりは、格別下直（げじき）にお世話つかまつり候」とあります。「芝居」というのは、大坂見物の中でも

重要な要素だった道頓堀での芝居見物のことです。その芝居見物も、旅館の方で直接劇場側と取引していますから、よそでお買い求めになるよりは、うちで買うてもらった方が安うで見物出来ますよ、というわけです。こういうプレイガイドとしての役割も、宿屋にはありました。宿屋はほんとうにいろんな機能を持っていたことが、この一枚の引札からもよくわかります。江戸時代は私たちが思っているような前近代社会ではなく、旅のシステムだけを見ても、かなり現代に近い高度な仕組みが出来上がっていたのです。

一生に一度のお伊勢参りで 必ず立ち寄った大坂

さて、江戸時代の旅における大坂の位置はどのようなものだったのでしょうか。信仰の旅には西国三十三ヶ所の観音巡礼や四国八十八ヶ所の遍路、金毘羅参り、善光寺参りというように、いろいろとありますが、江戸時代で最も信仰を集めたのは、なんといってもお伊勢さん（伊勢神宮）です。全国各地の村々に「伊勢講」や「神明講」という名でお伊勢さんの信仰のグループが作られました。こうした講では、毎月1回、縁日に集まり、皆で神事をし、

お金も毎月積み立てて、講としてそのお金をプールしました。そして、くじ引きなどで代表を決め、そのお金で毎年誰かがお伊勢さんにお参りに行き(代参)、村の安全を祈祷してもらい、各家のお札をもらって帰ってくる。これが「伊勢講」のシステムです。規模が大きい村では、たくさんのお金が集まりますので、村を代表して一度に3人も4人も行くことがありましたし、1人だけしか行けない村もありました。

江戸時代の庶民の旅の大半は、このような人たちのお伊勢参りだったと言えます。江戸時代、庶民が長距離の旅に出るのは、大体一生に一度で、その一度の旅がお伊勢参りというわけです。これは皆で積み立てたお金で行く、いわば公務の旅なので、旅の様子やお金をどう使ったかを全部記録に残さないといけません。その記録が道中日記で、今もたくさん残っています。ところが、それら江戸時代のお伊勢まいりの道中日記を集めると、意外なことがわかってきました。みんな同じようなコースをたどる、ということです。

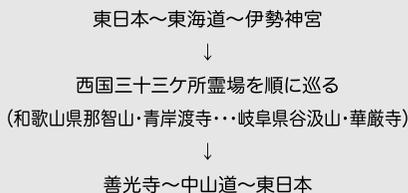
今回は「東からの旅」ということですが、関東や東北など東日本からの場合で言えば、大きく二つのコースに分かれます。

A 伊勢参宮+西国三十三ヶ所巡礼ルート

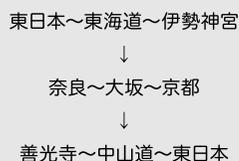
B 伊勢参宮モデルルート(西国巡礼を伴わない)
(右上図参照)

実は「東からの旅」、すなわち東日本からの伊勢参りというのは、この二パターンしかありません。どの道中記を読んでも、全部どちらかのパ

A 伊勢参宮+西国三十三ヶ所巡礼ルート



B 伊勢参宮モデルルート(西国巡礼を伴わない)



ターンに分類されます。**A**パターンでは、途中でお伊勢参りの格好から西国三十三ヶ所の巡礼姿に着替える必要がありますが、三重県玉城町の田丸という所で西国巡礼用の笠摺(おいずる)が売られていて、ここでお伊勢参りから巡礼姿に変身を行います。そして熊野へと向かうのですが、一番札所が那智山の青岸渡寺、二番が和歌山の紀三井寺、三番は紀ノ川をさかのぼって粉河寺、四番は大阪府和泉市の槇尾山施福寺。ところが、江戸時代の巡礼者は順番どおり単純には行かないのですね。三番札所の粉河寺から四番の槇尾山施福寺へは、和泉の葛城山脈を越えるとわりに近いのですが、何しろ一生に一度の旅ですから、この旅の途中でいろいろと有名なところに立ち寄ります。三番と四番の間では、必ずみんな高野山へお参りします。その後、橋本から河内長野を通過して四番の槇尾山施福寺。そして、次の五番札所は藤井寺市の葛井寺ですが、そこに直接行くかという、やはりそうではなく、この場合も四番槇尾

山から必ず堺、住吉を見て大坂へ入り、大坂での市中見物を終えて最後に四天王寺にお参りしてから五番葛井寺へ向かいます。

Bパターンの場合も大坂に来るわけですから、東日本からのお伊勢参りの場合、どちらのパターンでも、必ず、100%大坂にやって来たわけです。しかも大坂には旅の途中、最も長い期間、2～5泊程度滞在するのが普通で、どの道中記でもそうなっています。ですから、江戸時代の大坂は日本一の観光都市だったことは間違いありません。

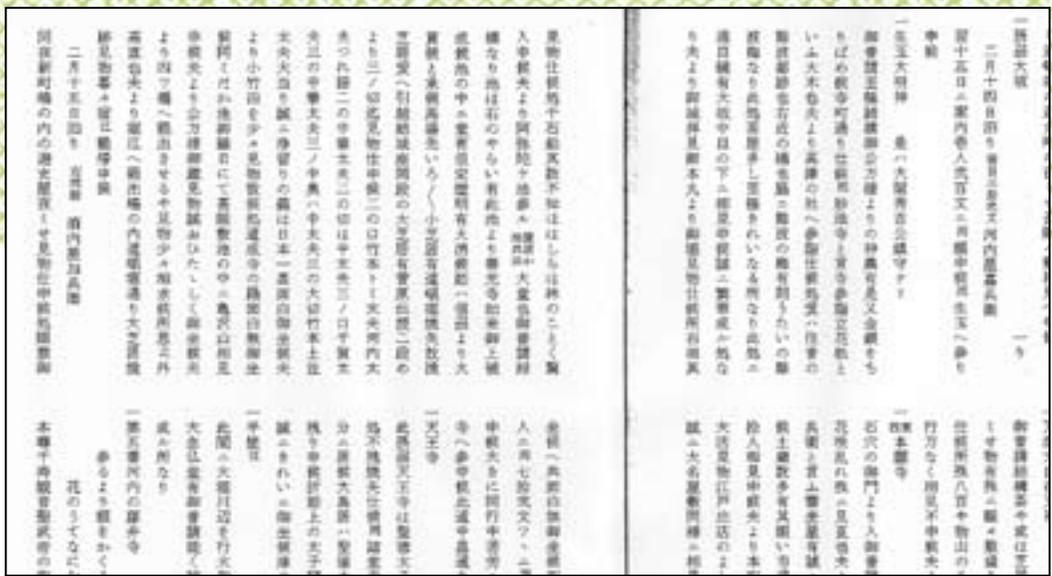
金毘羅参りも加わり、旅のステーションに

さらに1800年前後からは、**A**・**B**いずれのパターンでも、四国・讃岐の金毘羅さんへのお参りが加わります。金毘羅はそれほど由緒のある、有名な神様ではありませんでしたが、江戸時代の終わり頃には、伊勢と金毘羅は一生に一度は絶対参らないといけないと言われるぐらい有名になりました。幕府が各藩にそれぞれの地域の風俗・習慣などについて問合せ（アンケート調査）をしたのですが、東北地方の人でさえ伊勢と金毘羅は一生に一度は参るものだと回答しています。この金毘羅信仰を売り出したのが大坂で、よく知られている「金毘羅ふねふね」という、あの歌も、金毘羅参りのテーマソングとして大坂で歌いだされたものです。お伊勢参りの旅人を大坂からさらに四国へ動して一儲けしようと、大坂の宿屋が船旅という新たな旅を企画・提案したわけです。金毘羅船が、大坂の各所から毎日出ているのもそういうことなのですね。さきほどの「ひやうたん河内

屋」の引札にも、日本橋の下のところに三十石早船と共に金毘羅船が描かれています。当時の旅は陸路ばかりでしたから、この船旅という新たな観光商品は非常に人気を呼びました。そして、大坂から金毘羅参りに行った旅人は、必ず戻って、また大坂でお金を落としてくれます。金毘羅に行かせることで、大坂は二度もおいしい思いをしたわけです。さらに、この船旅は金毘羅から、安芸の宮島、岩国の錦帯橋へと、幕末になるに従って、どんどん距離が伸びていきます。前述の**A**と**B**、二つのルートとも、金毘羅参詣が加わるパターン（普及型）や、さらに安芸の宮島、岩国・錦帯橋が加わるパターン（拡張型）などが生まれるのですが、これらも**A**・**B**ルートのバリエーションに過ぎません。「分銅河内屋」に泊まる弥次さん喜多さんの旅を描いた十返舎一九『東海道中膝栗毛』は、実は当時のお伊勢参りの旅をベースにした物語なのです。あそこに出て来るお店や宿は全部実在し、すでにお伊勢参りの旅をした人は、自分の旅の経験と重ね合わせてあの本を読みましたし、これから出かける人は期待に胸を膨らませながら読んだわけです。金毘羅参りなど、旅のパターンが増えると、物語の方も『続膝栗毛』シリーズが刊行されて、これに対応しました。

「道中記」で追体験。木賃米銭の宿に泊まり境見物して大坂へ

さて、実際に道中日記を読んで、昔の旅と大坂の観光はどんなものだったのかをたどって行きましょう。天明4年(1784)に生まれた常陸国久慈



▲文化9年(1812)常陸国久慈郡高柴村 益子広三郎「西国 順礼道中記」(『大子町史料 別冊9』)

郡高柴村(茨城県大子町)の益子広三郎という人の「西国順礼道中記」です。彼は文化9年(1812)正月4日に地元の高柴村を出発して、帰宅したのは4月4日。総計87日間の旅を行ないました。江戸時代のお伊勢参りの日数がおおむねご理解いただけると思います。彼の旅は、さきに挙げた二つの内、お伊勢参りプラス西国三十三ヶ所の方のパターンでした。そして、途中で金毘羅さんにもお参りに行っています。一行4人の旅で、お伊勢参りの後、西国巡礼をしながら、三番粉河寺の次には高野山にお参りをし、四番和泉の模尾寺(施福寺)から境(堺市)に到着。「二月十三日泊、木56文、米80文、河内屋金十郎」とありますが、これは河内屋金十郎という宿に泊まり、薪代の木賃56文と米代80文を払い、自炊したという意味です。江戸時代の宿屋には3種類ありました。一番安いのが木賃宿で、お米や食べ物を全部持っていき、これを炊く薪代、すなわち木賃を払って自炊する。その次にランクの高いのが、木賃米銭の宿。お米は持参しなくてよく、宿で米と薪を買って自炊をする。河内屋金十郎はまさにこのタイプでした。仮に1文が30円としたら合計4千円ほど払ったこととなります。そして、もう一つ上のランクが旅籠で、ちゃんと料理を出してくれる高級旅館です。

翌十四日にガイドの案内で境(堺)を見物。境で

は定番の包丁を土産物として買っています。江戸時代は、名物といたらその土地で食べるもので、故郷への土産物は実用品を買うと区別していました。そして境をあとにした一行は、住吉大社、天下茶屋、姫松を経て、ようやく九つ＝正午に大坂に到着。「長町、河内屋加兵衛へ泊まり。昼食つかまつり申し候て、ただ一人道頓堀の芝居へ参り申し候」。他の人はほっといて、広三郎一人だけで芝居見物に行くとあります。当時とはとにかく上方歌舞伎は大人気で、有名な役者さんがたくさんいて、音に聞くスーパースターの実物を見ることができました。「古今無双の名人ゆえ、面白くござ候。千両役者片岡仁左衛門・誠に名人なり」と、大興奮で書いています。「芝居かかり銭三百三十二文」は境の宿賃と比べれば、いかに高いお金を払って芝居を見たかということがわかります。ゆるゆると楽しんで、戻り道で道頓堀の遊女町の夜店のにぎわいを見ながら宿に帰っています。

「二月十四日泊。宿百三十二文、河内屋嘉(加)兵衛」。宿とだけあり、木・米と書いていないのは、ここが旅籠だということを意味しています。

高いガイド料を払い、大坂をどん欲に観光した旅人

翌十五日には案内人を一人につき二百文(6,000円)で頼み、大坂見物を楽しんでいます。有料ガイド



▲『摂津名所図会』挿画「砂場いづみや」（『日本名所風俗図会10 大阪の巻』）

▲南天満公園にある「天満青物市場跡」の碑

東からの旅 お伊勢参りと大坂観光

がかなり高い料金だったことがわかります。一人当たり二百文ですから、宿代より高いわけです。

この日はまず「生玉大明神」（生國魂神社）に参っています。ここは当時の大坂を代表する観光名所のひとつでした。ついで高津の社（高津宮）に行きましたが、ここには遠眼鏡（望遠鏡）が置かれていて、繁栄する大坂のまちが一望できました。そして、大坂城から天満天神（大阪天満宮）に向かい、天満青物市場を見物して、東西本願寺（北御堂と南御堂）に行き、砂場（船場とあるのは翻刻の誤り。今の西区新町一丁目あたりに秀吉の大坂築城の際に砂置き場だったと伝える場所があり、そこを「砂場」と言った）へ向かい、和泉屋吉兵衛のそば屋をのぞいています。砂場にはもう一軒、津の国屋があり、この二軒がしのぎをけずって張り合い、砂場の蕎麦を有名にしました。大坂の庶民もよく食べましたが、明治以後、近代になると大坂ではうどんに押されてそばが衰退し、砂場のそばも東京に拠点を移しました。現在は150店舗以上が営業を続けており、「砂場」はそば屋のブランドとして関東で抜群の知名度を誇ります。

さて、和泉屋では、下男・下女を四十～五十人も使っていたとあり、広三郎は「誠に大きなけむとん（麵）屋」だと記しています。それから、本町通へ出て岩城升屋、三井越後屋（後の三越）という呉服の大店を見物し、また豪商・鴻池家の屋敷は、町人なのに、まるで大名屋敷さながらに見えた、とたまげています。

土佐堀川沿いに川岸を西に進むと、大湊に出、沖に停泊中のたくさんの大船（諸国の廻船）が見え、千石船は数知れ

ず、林立する船の帆柱はまるで海に林があるようだと記しています。市中の堀川は底が浅く、川舟しか入れませんでしたので、大型の廻船は沖に停泊しましたが、その様子も「天下の台所」として繁栄をきわめる大坂の代表的な景観で、他では見られないものでした。当時の大湊（大坂港）は、木津川口と安治川口の二カ所でしたので、広三郎らは、そのどちらかに行きに行ったと思われます。ちなみに貞享元年（1684）に安治川が開削されるまでは、伝法川口がもうひとつの湊でした。

続いて、阿弥陀池に参りますが、ここは善光寺如来が出現したという伝説の池で、その中にお堂があり、絶やすことなく定燈明がともされていました。この池のほとりに、善光寺の別院として和光寺が建てられたのは元禄年間（1688～1704）のことですが、周囲に石の矢来がめぐらされた池は今も当時のままの姿で残っています。ちょうど広三郎らが大坂にやって来た頃は、道頓堀の五座が火災で焼失していたので、この阿弥陀池和光寺の境内に五座のうちいくつかの小屋が移って営業しており、ここで浄瑠璃を楽しんだ広三郎は、浄瑠璃は日本一の面白さだと書いています。ついで幕府が飢饉対策用に建てた難波御蔵を見物し、

▼和光寺にある「阿弥陀池」

今橋二丁目にある豪商
▼「旧鴻池家本宅跡」の碑





◀はりまや源蔵 引札

(大阪引札研究会編 『江戸・明治のチラシ広告
大阪の引札・絵びら<南木コレクション>』)

そこから向かったのが四ツ橋。当時の大坂の土産物といえば、なんといってもこの四ツ橋の「きせる」で、ほとんどの旅人が買い求めています。煙草がわが国に入って来たのは戦国時代ですが、瞬間に女や子どもまでが煙草を吸うようになり、江戸時代はまさに喫煙全盛の時代でした。ですから、きせるの需要も高く、中でも最も有名だったのが大坂・四ツ橋のきせるでした。四ツ橋には「はりまや」を名乗るきせる屋が軒を連ね、「本家」「正本家」などいろいろと冠して互いに競い合いました。この道中記では、思いのほか高価だったとあります。さきほど紹介したものは別の「ひやうたん河内屋」の引札(ガイドマップ)には、「本家はりまや」の名が記されていますから、「ひやうたん河内屋」に泊まると、有料ガイドは旅人を「本家はりまや」に連れて行ったのでしょう。今でもツアー旅行などに参加すると、特定の土産物屋に連れて行かれるというのはよくある話ですが、江戸時代から既にそういうシステムができあがっていて、宿屋とガイドと土産物屋はグルになっていたわけです。やっぱり江戸時代は馬鹿にできませんね(笑)。このように彼らは、この日いちにち、実に忙しい大坂観光をし、最後に道頓堀五座の焼け跡を見て、やっと宿へ帰っています。

この日も広三郎らは河内屋嘉(加)兵衛に泊まりましたが、夜にはまた出かけ、大坂一の色町だった新町の遊女屋を見物しました。たしかにたいそうな賑わいでしたが、とりたてて面白くは思わなかったと記しています。このナイト・ツアーだけで、有料ガイドの案内銭が一人につき七十二

文(2,160円)でした。夜中に同行の者が食あたりになってたいへん難渋したとも書いています。

翌十六日は宿を出立して四天王寺にお参り。七堂伽藍と聞いていたが、これまた焼失して普請中だと書いています。亀の池や石の大鳥居、そこに懸けられた「釈迦如来 転法輪

所 当極楽土 東門中心」の扁額などを見ています。そして、平野郷に行き、大念仏寺の巨大な本堂に感心します。平野郷についてもすばらしい町だと称え、ここから西国巡礼の五番札所・葛井寺へと向かいました。当時のガイドブックには、滞在日数によって、いろんなモデルコースが提示されていますが、大体これが、典型的な大坂観光のパターンでした。

四天王寺、大坂城、芝居見物・・ 商都の活力も魅力に

私は、こういう道中記をたくさん集めて研究していますので、江戸時代の旅人が、大坂に泊まってどこを見に行っているか統計を取ってみました。宝永三年(1706)～文久二年(1862)に至るまでの道中記32冊を分析した結果です(次項図)。

1位はなんといっても四天王寺。また、この時代、驚くべきことに大坂城の中を見学することもできました。阿弥陀池は、善光寺如来出現の地として全国的に有名。これがベスト3で、こういった所も見ながら、道頓堀の芝居見物もして、江戸時代の旅人が最も多くの時間を費やしたのが、大坂でした。江戸時代の道中記を見ますと、京都や

東からの旅 お伊勢参りと大坂観光

奈良は今の観光と変わらず、行く所も今と一緒に、奈良では鹿せんべいを買って鹿にやったりもしていますが、江戸時代の大坂観光はそうした京都・奈良とはずいぶん違ったんですね。もちろん大坂にも古寺名社はあり、そうしたところも見てまわっていますが、道頓堀の芝居見物など、大坂という最先端の都市文化の魅力を楽しみ満喫するのが大坂観光の最大の特徴で、たとえば天満の青物市場なんかも、ものすごい人気でした。田舎から来た人には信じられないぐらいの量の青物が山積みされているのに驚き、それが一瞬の間に売り捌かれて無くなってしまうので再度驚く。そうした「天下の台所」大坂の商都としての活力も、江戸時代の大坂観光の大きな要素でした。

「無いものを見せる」—現代大阪観光の鍵は歴史の物語

上町台地に関していえば、江戸時代の大坂の地図は大坂城のある東を必ず上にして描かれました。大坂城が江戸時代の大坂では最も高貴な場所だったからで、江戸時代のそうした空間認識からいうと、船場の東にある上町はまさに地図の上の方にある「上町」だったわけです。東横堀や西横堀も、そういう空間認識だったことを理解して初めて「横堀」であることがわかります。それ以外の堀、道頓堀や長堀はすべて東西に流れる「縦堀」だったわけです。

東横堀は、船場と上町の境界線でしたが、その東横堀は豊臣時代には大坂城の西惣構堀（にしそうがまえぼり）で、この堀より東は大坂城の内側でした。ですから、「上町」はまた「内町」とも

江戸時代の人に聞きました。

大坂人気観光地らんきんぐ

- 1位 四天王寺
- 2位 大坂城
- 3位 阿弥陀池
- 4位 生玉社・高津社
西御堂(北御堂)
東御堂(南御堂)
- 8位 道頓堀芝居
- 9位 天満宮
- 10位 大湊
- 11位 妙法寺立花松
座摩社・鴻池
- 14位 砂場
- 15位 四ツ橋煙管屋・新町

呼ばれました。船場の「平野町」「淡路町」「本町」「久宝寺町」に対して、「内平野町」「内淡路町」「内本町」「内久宝寺町」になるわけです。「町人の町」といわれる江戸時代の大坂ですが、その中核はやはり大坂城で、大坂の町は大坂城の城下町だったことを再認識する必要があります。

今も大阪城には毎日毎日たくさんの観光客がお越しになります。でも、その大半が天守閣だけを見て、さよならです。なんとも残念です。大阪城には天守閣以外にもたくさんの見所があるので、ぜひそれらを見てまわって欲しい。それから、大坂の陣の舞台になった史跡・伝承地も大阪城周辺にはいろいろとあるので、ぜひそちらも訪ねて欲しい。歴史の舞台に立つと、当時の様子がはっきりとした映像になって頭に浮かぶはず。歴史の現場」だけがもつ「場の力」、その迫力を感じて欲しいと思います。私は、抜群の知名度を誇る大阪城・大坂の陣と、それにまつわる物語を結びつけた観光ができないものか、いろいろと試行錯

変わりゆく道頓堀▶



誤を繰り返してきました。大阪城・大坂の陣以外でも、難波宮・四天王寺・熊野街道など歴史の舞台になった場所が上町台地には数多くあります。歴史上の史実だけでなく、歌舞伎や文楽、能などの物語になった話も多いし、落語・講談の舞台もたくさんある。そんなすぐれた財産をなぜ活用しないのか。なんとももったいない。ほんとうに忸怩たる思いでいます。

今は旅行に行く機会も増え、伊勢神宮にお参りする人も、江戸時代より現代の方が断然多くなっています。大阪を訪れる人も当然今の方がはるかに多い。今の大阪で観光客が行く所といえば、大阪城、USJ、海遊館、通天閣、道頓堀といった所ですが、私自身は、大阪にはもっともっとおもしろいところがたくさんあると思います。でも、そのおもしろさがわかるには歴史や古典の物語を知っていなければならない。教養が必要な、少し知的な旅ですね。現代の観光はそうしたレベルに来ていると思っています。2014年、2015年には「大坂落城400年」を迎えます。豊臣秀頼とその母淀殿、真田幸村や後藤又兵衛といった豊臣方の智将・勇将、大御所徳川家康、将軍秀忠、徳川方の諸将、そして大坂の市民や近郊農村の百姓ら、さまざまな人間模様が渦巻いて、「落城400年」には「築城400年」よりもはるかに豊かな人間ドラマがあります。そして大坂は全国を相手に戦い敗れたものの、くじけずに復興を遂げ、「天下の台所」として再び繁栄をきわめました。現在の大阪の厳しい状況を重ねると、今の時代にとっても「落城400年」は大阪の再生を考える上で意義深いことだと思っています。2014年・2015年の大坂の陣400年

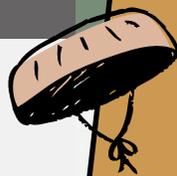
に向けて、今後いろいろな取り組みをしていくつもりです。

これまで私は、大阪城や上町台地の魅力をアピールするため、さまざまなイベントに取り組んで来ましたが、そうした中でも、私自身が自信を持ってご案内できるのは大阪城と大坂の陣に関する史跡を回ることです。大坂の陣の史跡といっても、とくに何があるというわけではありません。

でも、その歴史の現場に立って、そこで実際にあった出来事を聞き、そのシーンを脳裏に思い浮かべるだけで、そこは一瞬にして「観光地」になります。かなり贅沢な旅です。このようにして「無いものを見せる」というのが、新しい観光のスタイルではないかと思っています。鉄筋コンクリートの天守閣に過ぎない大阪城の方が、なぜ世界遺産に登録される姫路城よりもはるかに多く観光客が訪れるのか？それは要するに、大阪城には秀吉の天下統一の物語、大坂夏の陣での落城の悲劇、こうした物語が付加価値となって、その舞台である大阪城に多くの人々が引き寄せられるからではないでしょうか。歴史上の出来事や物語を聞くことで、見えないものが見えてくる。すなわち、見えないものを見せていくことが、これからの大阪観光の鍵だと思っています。



▲四天王寺のお彼岸風景



落語家
笑福亭仁智氏

昔の旅と人の温かさにあれた、
お伊勢参り1770km踏破の体験

落語「東の旅」を歩いた「伊勢参り落語会」



▲平成4年夏、弟子たちと大阪から徒歩で「伊勢参り落語会」を

私は、平成4年の40歳を迎える夏に「伊勢参り落語会」というのをおこないました。これは、大阪から伊勢神宮までチャリティ落語会（収益金は老人福祉のために寄付）を開きながら歩いたんですね。上方落語には、お伊勢参りをする旅の噺「東の旅」というのがありまして、それを自分の足で歩きたいと思ったんです。旅と落語の原点にふれ、自分を見つめ直したかった、と言いますか。弟弟子の三人と

一緒に玉造稲荷神社でお祝いしてもらって出発しました。6泊7日の旅で、1日一回落語会をしながらと思い、集客のことも考え人の住んでる方をと、ちょっと遠回りですけど、伊勢の本街道じゃなしに名張を通る表街道の方をとって、伊勢まで1日25キロ、170キロの道のりを歩きました。浴衣に、てっこう脚絆、笠をかぶって、足はスニーカーという恰好でした。



▲玉造稲荷神社が発行している「伊勢参宮本街道行程図」

▼お伊勢参りのスタート地・玉造稲荷神社でお祝いしてもらい出発





▲真夏の徒歩の旅は貴重な体験に

新聞が協力してくれて、「こんな旅をするから、会場を募るので、ここでやってほしいというかた、どうぞ手を挙げてください」と言いましたら、歩いてどうぞすんねん、というか、忘れられていた旅みたいに受け取られたのか、結果的にもものすごい反響がありました。ここでやって、あそこでやって、と、ほんとにもう、断るのに苦労したぐらい、うれしい悲鳴をあげました。実際に歩いている時も、いろんな人から声かけていただいたりしました。実は、10年前に2回目を歩いたんですが、最初の時と感触が全然違うんですね。1回目はものすごかったんですけど、2回目はほったらかしなんです。時代の流れとか、その時の告知、周知のしかたとか違いがあったんでしょうが。

たり、思いがけなく深い話もできる。なんと言うんですか、昔の人の時間の感覚や旅の気分を感じながら、今自分たちが忘れていたものを再発見できるような新鮮な体験で、「ああ、私にもこんな気持ちがあんねや」と、改めてまた進もうという気持ちになりました。受け入れ側の人も「よう歩いてきたなあ」と迎えてくれてね、雨宿りさせて

くれたおばあちゃんは「昔はここをよう歩いてきてたんやで」とか言って、懐かしがっているような話をしてくださった。横道にそれて道を間違えて、何でこんな遠回りをして、足に豆ができて



▲旅の無事を祈願

しんどいのにはせなあかんねんとか、雷雨におうたりとか、いろいろありましたけど、人の温かい心に触れた、すごい中身の濃い、語りつくせんような旅であったと思います。人が平穏無事を願う素朴な祈りの気持ちも実感しましたし、お参りというのは、浄化されるに行くものなんですね。再来年には還暦を迎えるので、60歳がまた行く良い機会かなとは思っているところです。

その1回目、真夏に歩いて思ったことがあります。歩くっていうのは、そのスピードに自分の考えや目線がついてくるわけですから、ふと立ち止まって人としゃべっ

◀「上方落語喜講」ののぼりを掲げる旅途中の仁智氏



笑福亭仁智氏口演「東の旅」〜「三人旅」を中心に
 上方落語でたどる昔のお伊勢参り
 「東の旅」ほか、大坂からの旅噺



今日、私がやりますのは「東の旅」の中の「三人旅」という噺です。普通、「東の旅」はお伊勢参りをする二人の道中の噺で、最初はこうです。大坂のウマの合いました喜六と清八という二人の男がお伊勢参りでもしようやないかと、黄道吉日を選んで出立する。親戚、近所それから友達にあいさつを済ませまして、安堂寺橋を東へ東へ、「大坂離れてはや玉造」とそういう



歌があるように、玉造は大坂のはしでござ
 いますね。二軒茶屋という枳屋芳兵衛と鶴
 屋秀次郎の茶屋がありまして、ここで酸い
 酒の一杯も飲みまして、見送りの友達と別
 れまして、そこから二人連れ。東へ道をと
 りますと、「笠を買うなら深江が名所」てなこ
 というてね、深江笠という名前は深いんで
 すけど、実際は浅いんですね。それから御厨
 (みくりや)とか、額田(ぬかた)、豊浦(と
 ゆら)、松原を越えまして、やってまいりま
 したのが、くらがり峠でございます。「くら
 がりと、いえど明石の沖までも」てな句碑が
 残ってございますが、暗がり峠やなしに、坂
 が急なんで、馬がひっくり
 がえる、鞍がひっくりかえ
 るから、鞍がえり峠、とい
 うのが始まりやそうござい
 ます。・・というようなこと
 で、「東の旅・発端」が始ま
 るわけでございます。

▶ 深江稲荷神社にある碑
 深江の菅笠は伊勢参宮の
 旅人の必需品



「三人旅」

この噺は、大坂の気のおうた三人一喜六、
 清八、源兵衛が旅を続けるもので、そのお伊
 勢参りの道中の出来事。馬に乗ろうという
 ので、安い馬方を探し、お百姓が野良仕事

◀ JR玉造駅前にある
 「二軒茶屋」の碑



◀大川ぞいの南天満公園にある
「淀川三十石船舟唄碑」

の片手間にやってるのをようやく見つけるが、三宝荒神乗りで三人が乗ってみると、足も片目もけがをしてる馬で・・・。「宮川越すに越せんことないけど、行きがせわしないさかい、今日は明星泊まりにしようと思てのう、三田屋三郎兵衛、玄関横付けでなんぼで行く？」というセリフが往時の旅を彷彿とさせます。宿の名も実在したものだ。

「東の旅」は「伊勢参宮神乃賑」とも言い、オムニバスの大河落語で、大坂～伊勢の往路往路にさまざまな噺があります。そのコースは、玉造から暗越奈良街道～奈良上街道～初瀬街道～伊勢本街道を進んで伊勢神宮一内宮へと至り、帰路は松阪、津、亀山、鈴鹿を通して草津、大津、京、伏見から三十石船に乗って大坂八軒家に帰る、というのがルートと言えます。噺にも順があり、現在演じられているものをあげると、

「発端」→「奈良名所」→「野辺」→<→「法会」
→「もぎとり」→「軽業」>→「煮売屋」→「七度狐」→「運つく酒」<→「三人旅」>→「宮巡り」<→「高宮川天狗の酒盛り」>→「軽石庇」→「矢橋船」→「宿屋町」→「瘤弁慶」
→「京名所」→「三十石夢の通い路」

お伊勢参りの帰りの噺で、兵庫の三人連れが日本橋の宿屋に泊まる「宿屋仇」という大作もあり、これは武士と隣り合わせたために大騒動になる物語。もう一つ、お伊勢参りでは「百人坊主」という噺もあり、昔の各村にあった伊勢講の様子も伝えている貴重な噺。

ちなみに「西の旅」というものもあり、金毘羅参りの帰路をみつかったもの。「播州巡り」(「明石名所」)→「兵庫船」。

また、大坂にやって来る旅もあり、「上方見物」という噺は田舎から観光で来た二人連れが芝居で有名な道頓堀を見物がてら、日本橋界隈の商店をひやかして笑いになります。

▼土佐堀通に設けられた
「八軒家船着場の跡」の碑



▲天満橋のたもとによみがえった八軒家浜船着場

上方落語でたどる昔のお伊勢参り
 上町台地を舞台にした多彩な噺

お伊勢参りの「東の旅」は、京の伏見から三十石船に乗って終点の天満橋のところの八軒家に帰って来ます。この八軒家のあたりから南が上町台地になるわけですね。上方落語には、この上町台地を舞台にした噺がいくつもあります。

「天神山」

(一心寺、安居神社)

花見時分の噺。へんちきの源助という変わった男が花見ならぬ墓見をしようと一心寺へ。ある墓を相手に一人で酒宴をし、そこにあるしゃれこうべを持ち帰る。すると、その夜「昼間のお礼に」ときれいな幽霊の娘が訪ねて来て、押しかけ女房になってしまう。それを聞いた隣の安兵衛が、自分も嫁はんが欲しいというので、一心寺に行くが、しゃれこうべは見当たらず、向かいの安居の天神さんにお願いしにゆく。そこに狐穫りがいて、狐をつかまえ高津の黒焼き屋に持って行くという。可哀想に思った安兵衛がなけなしの金で買い取り逃がすのだが、狐は化けて安兵衛のもとに行き、押しかけ女房に。「音屋道満大内鑑」葛の葉の子別れのパロディで、結局、正体がばれて「恋しくば訪ねきてみよ(信太の森と違い)南なる天神山の森の中まで」と書き残して姿を消すという噺です。

「初天神」

(大阪天満宮～馬場町)

父子が一月二十五日の初天神の日に天満宮に行き、「あめ買うてくれ」「みたらし買うてくれ」という子に「こんな奴、連れて来んかったらよかった」と父親がぼやいてると、今度は「凧を買うてくれ」と子どもがせがみ、仕方なしに買った父親。大坂城の馬場(ばんば)ー今の大阪城の大手前のあたりですか、この馬場まで凧を揚げにいく。ところが、父親が凧揚げに夢中になってしまい、子どもが「凧揚げさせてくれや」と言っても「やかましい、こんなのは大人がするもんや」と言うてね。子ども「ああこんなやつたら、お父つっあん連れて来るんやなかった」というのがオチです。



▲大阪天満宮



四天王寺▶



▲安居神社には、狐穴が残る



▲マイドーム大阪の前に建つ「西町奉行所」の碑

他にもこんな噺があります

- ◎瓦屋町を舞台した噺「**落久**」
- ◎本町橋・西町奉行所を舞台にした噺
「**佐々木裁き**」(松屋町表町も)、
「**次の御用日**」「**落久**」「**五人裁き**」
- ◎高津宮を舞台にした噺
「**高津の宮**」「**崇徳院**」「**高倉狐**」
- ◎生國魂神社を舞台にした噺「**鱈坊主**」
- ◎産湯稲荷を舞台にした噺「**稲荷様**」
- ◎真田山を舞台に、あるいは出て来る噺
「**真田山**」「**真田小僧(六文銭)**」
- ◎下寺町を舞台にした噺「**八五郎坊主**」
- ◎四天王寺を舞台にした噺
「**天玉寺詣り**」「**鷲駝り**」「**弱法師(策刀息子)**」
- ◎新清水を舞台にした噺「**茶目八**」

「らくだ」

(野漠 = 谷町六丁目付近)

この噺の舞台は、「野漠」といって、瓦土取り場のあった、今の空堀の界隈らしい。その裏長屋に住む「らくだ」という男が亡くなった。そこへ、「脳天の熊五郎」という男がやくざっぽい男が現れ、通夜のまねごとをしたろうと思った所へ紙くず屋が通りがかる。災難は紙くず屋で、町の月番や家主とこにいろいろ集めに行かされ、死人のカンカン踊りの手伝いまでさせられる。それが終わったら「さあ一杯飲め」と無理矢理飲まされ、そうするうちに、酔っぱらった紙くず屋と熊五郎の立場が逆転して・・・という大阪の落語を代表する噺です。



▲高津宮

『まち歩き』で現代の 大阪観光を提案する

オダギリサトシ氏

(株式会社インブリージョン ツーリズムプロデューサー)



▲空堀ツアーで町並みを楽しむ参加者

地元と交流する新しい上町台地 観光で、古今のまちの魅力を

私は大阪・上町台地の中心で生まれ育ちました。観光という切り口でこの町の魅力を知っていただきたいと思い、かれこれ7~8年ぐらい活動を続けております。旅行会社の企画として、大阪のいろんな所を売り込むということをやっております、その一環として、まち歩きで大阪を知ってもらいたいと考えまして、昨年「OSAKA旅めがね」という、まち歩きの観光プログラムを行っています。

なぜ、まち歩きが良いのか。従来は団体で、ドットとある施設へ行ってパッと見てドットと移動する。そういう繰り返しの物見遊山型の観光が多かったわけです。しかし、そういう形態では、どうしても、その地域の魅力を知ることができないという観光業界の課題がありまし

た。そこで、じっくりまちを見るには、やっぱり歩きながら見ていくのが一番と考え、それも、地元の人あるいはその地域のことに精通している人が一緒に案内しながら、まちを見て行くことが大事だと思い、そういう提案をさしてもらっています。

私のやっている「OSAKA旅めがね」は、そういう「まちを歩いて観光する」プログラムです。今は、ガイドブックもインターネットもあるし、そういうものを調べれば、いくらでも勝手にまちを歩くこともできるのですが、「大阪旅めがね」では、もう一歩踏み込んで、その地域の人と交流したり、その地域でしかできないことを体験したり、というようなことをさせてもらっています。

上町台地ではプログラムが3つあり、1つは寺町。谷町九丁目から天王寺に向かってたくさんのお寺が並ん

▼寺町ツアーでは三ニ座禅体験も



天王寺七坂のうちの一つ源聖寺坂▶
車では見ることができないところ
を行くのが、まち歩きの魅力



▲空堀ツアーで訪問する老舗かつおぶし店



なかなか入りにくいものですが、それを案内人と一緒に行くことで、中を見て回ってもらおうということをやっています。もう一つ、松屋町のあたりの空堀エリアは戦争で焼け残っていますので、古い昭和の町並みも楽しんでいただきながら、空堀商店街で昔から商売をされている店など3か所ほど立ち寄り、お店の方に地域の生活文化を聞きながら、まちを見学していただいています。3つ目は道頓堀から船に乗り、大阪城公園まで行って大阪城を見るという。以上のような3つのプログラムを実施していて、地元の人と交流できる時間を持てるのが、このまち歩きならではの楽しみ方ではと思っています。実際、参加された方のアンケート結果を見ると、一番多い答が、こんな場所はよく車では通っているけど、歩いたことが無いから知らなかったというご意見。2つ目に多いのが、地元の人とお話することができて良かったというご意見です。これは従来型の観光では、絶対に味わい得なかった観光を提供しているのかなと思っています。

しかし、上町台地はものすごく魅力はあるのですが、多くの人が上町台地を知らないのが非常に問題で、悩ましいところでもあります。歴史がほんとにいっぱい詰まっていて、これも魅力の一つですが、私が一番上町台地の

魅力として薦めてるのは、歴史だけじゃなく、今の文化もある点です。この界隈でもたくさん新しくお店ができてきて、すごく有名なケーキ屋さんやカフェもでき、この静かな雰囲気を気に入り、違う所で飲食店をされていた方が移って来られたりもしています。これからは、歴史と新しい文化が入ってきているという点もポイントに上町台地を観光スポットにできれば、と考えております。



▲地元の方から昔の町の様子などについて伺う

「水都の楽しみ、大阪大」
OSAKA旅∞
REALITY

「OSAKA旅∞(おおさかたびめがね)」は、水都大阪2009の「クルーズ&ウォーク」企画としてスタートした、地元密着型の大阪の新しい観光プログラムです。

従来の「観光地や名所旧跡」や「コテコテ大阪」だけではない地域の暮らしに根ざした「リアルな大阪」や「水都大阪」の魅力をクルーズ、まち歩き、体験学習などで体感できます。

<http://www.tabimegane.com/>

栗本智代氏

大阪ガス（株）
エネルギー文化研究所
主席研究員



上町台地には、非常に貴重な歴史が刻まれ、豊かな歴史的・文化的資源があります。

それを忘れることなく、今もう1回見直して、これからどのように活用して楽しめるようになるかを考えないと、大変もったいないと思います。大阪を、上町台地を、歴史文化薫る、趣深いひとつの観光地、観光名所としていくにはまずどうしたら良いか？という課題があるわけです。

しかし、上町台地って何？と、知らない、聞いたこともないという方もおられます。そういう中で、いかに大阪の背骨としての上町台地を知ってもらうかが大事です。昨年開催された「水都大阪2009」では、船と合わせたまち歩きコースが大変人気でした。この上町台地こそ歩いて見て回る、非常に良い場所ではないでしょうか。

今日の話に出ていなかった点として、過去にはなくて今にある大阪の文化、その一つに「大阪人」があると思います。江戸時代ですと、大阪人は、商人という特徴が目立ちますが、今も、商店街の店主に

値切って安く買い物をするのを楽しみに、また“大阪のおばちゃん”に外から会いにくるというのも1つの大阪の楽しみ方に入っているようです。

現在、まちづくりに取り組む住民の方々を中心に、ボランティアからプロフェッショナルまで、大阪らしいユニークなガイドでまち歩きを案内してくれるツアーがかなり増えてきています。

一方今日のお話で、上方落語は上町台地が舞台になっているものが多い、ネタの宝庫であるというのもよくわかりました。落語と歌舞伎は同じ素材が多く、例えば「らくだ」もそうで、東京の歌舞伎ファンが実は上町台地が舞台なのだということを知れば、上町台地に興味もわくでしょう。

この地域でしか出来ない体験を提供する可能性やポテンシャルは、上町台地には山のようにあると思います。見えない物語というのにもたくさんありますので、それをいかに見せていくかがひとつのポイントかと思えます。そのような複数の新たな企画やツアーをすべて一つのところで取り仕切るプラットホームのような組織が今は大阪になく、それが大きな課題と言えます。

まずは今日のシンポジウムに来られた方から率先して上町台地を体験していただき、さらにお仲間を誘っていただければ、それがもう次の一歩になると思います。

参加者の声

- 物語を見せるという新しい観光の視点を、知人にも紹介したいと思いました。
- 楽しいお話でした。より詳しく上町台地を知ることができました。また、歴史等ツアー・旅行的な催しをしていただきたいと思います。
- パネルトークでいろいろな立場からの話が聞けて興味深かった。
- 本日のように落語あり、講演あり、トークありがよい。いろんな楽しみ方ができると思います。内容も今回のように、歴史を庶民的な観点により触れていただければうれしい。
- 北川先生のお話、とても興味がありました。説明を聞いたら一度上町台地を歩いてみたいと思いました。
- いろいろな角度から上町台地の今後についての戦略などのお話を聞け、非常に有意義でした。歴史のイベントにはあまり参加していないので、今後も企画してほしいです。



上町台地における歴史に育まれた文化環境と緑豊かな生活環境などを最大限に生かしながら、個性豊かな魅力ある居住地の形成と居住地としてのイメージ向上を図るため、上町台地で研究やまちづくり活動を行う個人・各種団体等と連携・協働し、大阪市と共に、都市居住のリーディングゾーンとしての魅力的な「まちなみ」を将来に引き継ぐことを目的としてさまざまな活動を行っています。

上町台地には豊かな資源があります。

歴史・自然・文化・生活など、さまざまな記憶。

都市に住まう楽しさや美しさ、新しい魅力あるまちを創造し、

次世代に引き継ぐため、協議会はさまざまな活動を行っています。

①まちづくり活動をサポート

魅力的なまちづくり提案事業に助成金を提供し、元気を応援しています。

②資源調査

未来に届けたい、上町台地の魅力を掘りおこしています。

③魅力発信

ホームページを通じて上町台地の魅力や情報を発信します。

④イベント開催

会員向けの交流会・勉強会や、多くの方に上町台地の魅力を伝えるイベントを開催しています。

上町台地マイルドHOPEゾーン協議会では、ここに暮らす人、働く人、まちづくり団体などが連携して、新しい「都市居住」の価値を作り出すために数々の事業に取り組んでいます。

会員49団体：NPO・寺社・学校・経済団体など

- | | |
|--------------------------|---------------------|
| 上町台地からまちを考える会 | 高津高等学校 |
| NPO法人天王寺21協議会 | 五条商店街 |
| NPO法人まち・すまいづくり | あいね・谷町9丁目店 |
| 空堀商店街界限長屋再生プロジェクト | 西代官山クラブ |
| 北大江地区まちづくり実行委員会 | にぎわい堂 |
| てんのうじ観光ボランティアガイド協議会 | (有)東西屋 ちんどん通信社 |
| 大蓮寺・應典院 | 直木三十五記念館 |
| なにわ人形芝居フェスティバル運営委員会 | 天王寺区仏教青年会 |
| NPO法人大阪ワッソ文化交流協会 | 土佐堀研究会 |
| NPO法人関西クリエイターズネットワーク | 上町台地歴史資産力研究会 |
| 関西経済同友会 | (株)ダン計画研究所 |
| 大阪商工会議所天王寺・阿倍野支部 | 大阪商工会議所中央支部 |
| NPO：後悔しない家造りネットワーク《いい家塾》 | JR西日本(株) |
| NPO法人大阪城甲冑隊 | 近畿日本鉄道(株) |
| (独)日本学生支援機構 大阪日本語教育センター | 関目都市住宅建築研究所 |
| 追手門学院 | 茶臼山を古戦場跡にする会 |
| 高津宮 | 大阪文化・観光資源研究会 |
| 生國魂神社 | 松屋町スタイル研究会 |
| 銀山寺 | 難波夢おこし会 |
| 一心寺 | 一茶菴 宗家 |
| 四天王寺 | 自転車文化タウンづくりの会 |
| 堀越神社 | NPO(市民団体)OSAKAゆめネット |
| 玉造稲荷神社 | 大江まちづくり協議会 |
| 清寿院 | (株)天勇 |
| 高津高等学校 | 特定非営利活動法人 高齢者外出介助の会 |
| 五条商店街 | |

※H22.3末現在 ※敬称略 順不同

名大物阪 上町台地

UEMACHI DAICHI

上町台地マイルドHOPEゾーン協議会





【発行】

名大
物阪

上町台地

UEMACHI DAICHI

上町台地マイルドHOPEゾーン協議会

TEL:06-6208-9631 FAX:06-6202-7064

E-mail:info@uemachi-hope.net

HP:http://uemachi-hope.net/

【発行日】平成22年3月

【協力者】やまだりよこ 藤田ツキト

(株)バード・デザインハウス